

「私の珍品カメラ その4」

発表者: 会員番号0022 高島鎮雄

開催日時: 2018年11月10日午後2時～

場所: JCI16階会議室

今回はあまり難しいカメラは避けて、私のコレクションからいわゆる珍品カメラをいくつかご紹介することにしました。なにが珍品カメラか？というの難しい問題だが、あまり難しい事は言わずに、普通と違う異形のカメラ、何か別のものに偽装したカメラ、カメラに撮影以外の別の機能を組み合わせたものなどをアトランダムに取り上げた。まず思い出すままに珍品をリストアップしたが、どこかへ仕舞い込んで見つからないものがいくつかあった。また終わってから「ああ、あれもあつたっけ」、と思いつくものもあつた。それらはまたいつかご紹介することにした。

Photosphere 9×12cm (写真1)

Compagnie Française de Photographie, 1888
Wooden body covered with metal, RR lens and hemispherical variable speed shutter.
W=150mm, H=119mm, D=152mm, 650g

私のコレクションの中でも最も古いものの一つで、明治21年の発表とされる。外国の書籍でも「史上初の全金属製カメラ」としているものがあるが、それは現物を手にしないで書い

たものだろう。実際には木製ボディを金属で覆ったものだ。男性なら永遠の憧れである母性なるものの象徴を想起するであろう。フォトスフェールにはステレオもあり、当時フランスでは水着の若い女性が胸高位置に構えた戯画が描かれている。水着の露出度が今街を行く女性よりもはるかに小さかった頃の話である。この半球は単なるレンズのスペーサーではなく、内部のシャッターに由来する。すなわち内部にも穴の空いた半球があり、それが首を振って露出する。内部の半球にはシャッターの動力として細く長いコイルスプリングが結ばれている。そのボディ側は外部のネジに繋がっており、それを回すとテンションが変わり、シャッター速度が調節できる。ただしシャッター速度は1～5と目盛られており、何分の1秒かはわからない。先端のレンズは回すとスクリーンで伸縮し、ピント合わせができる。原始的だが、カメラの定型が決まる前の面白いメカニズムである。

Stirn Concealed Vest Camera No.1 (写真2)
C. P. Stirn, Berlin, 1886～1892

Takes 6 circular photos of 45mm diameter on circular glass plate of 127mm diameter.
W=150mm, H=164mm, D=55(20)mm, 500g

薄い円盤を首から下げ、チョッキの下に隠す。ボタンに似せたレンズをボタンホールから出し、下の紐を引いてシャッターを切るスパイカメラ。事前に前面中央のノブでスプリングを巻いておくと、撮影後円形の乾板が60度回転し、円形の写真が次々に6枚撮れる。

ドイツのシュティルンの発明かと思いきや、実はアメリカのロバート・D. グレイが1886年に考案したもの。彼はシュティルンに特許を売り、シュティルンはベルリンとニューヨークで生産した。最初の3年間で1万5000台売ったというから、もはやスパイカメラとはなりえなかったろう。

Expo Watch Camera (写真3)

Expo Camera Co., N.Y., 1905～1925
Ticka, Houghtons Ltd., takes 25 16×22mm photos, 20mm F16 lens, T, I shutter.
Diameter 55mm, H=75mm, D=23～25mm, 75g

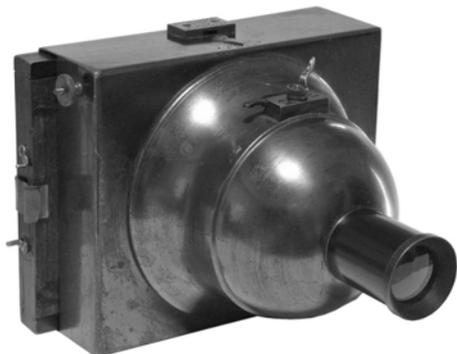


写真1 Photosphere 9×12cm



写真2
Stirn Concealed
Vest Camera No.1



写真3 Ticka (left) and Expo Watch Camera (right)



写真 4 Steineck ABC
Wristwatch Camera

写真 5 Stylophoto Standard

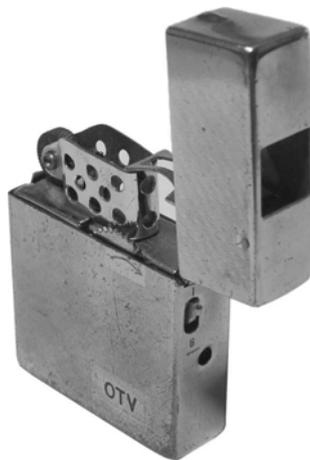


写真 6 Camera-Lite
Model B Gold



写真 7 Ergo (301)

開始したのが1956年で、これはその記念品
だったのではないかと思われる。McKeown's
にもまったくおなじOTVが載っている。もちろ
んシガレットライターとしても機能する。

Ergo (301) (写真7)

Zeiss Ikon 1927~1931
For 4 × 6.5cm glass plates, Tessar 50mm
F4.5 lens, rack & pinion focusing,
T, B 1/25, 1/ 50, 1/75, 1/100 shutter
W=55/67mm, H=80mm, D=113mm, 380g

モノキュラーを覗く振りをして左横の被写体
を撮る一種のスパイカメラ。ドイツのネット
ルが1909年にアルグスの名で発売、コンテ
サ・ネットル時代の1913年ごろにエルゴに
なり、1926年に成立したツァイス・イコンにも引き
継がれて1931年まで生き延びた。元々はフラン
スのレオン・ブロックが1898年に発明した
フィジオグラフのコピーであった。フィジオグラ
フにはステレオもあり、藤田嗣治が愛用したこ
とが知られている。アトム判乾板用で、レリー
ズを押すと左横の窓が開き、エバーセットの
シャッターが切れる。モノキュラー先端の対物
レンズは黒エナメル製の擬態で、アイピースの
直前左にファインダーの対物レンズがある。
50mm F4.5のテッサーとラック・ピニオンの焦
点調節、T、B 25~100のシャッターをもつ高
級機だ。日本にも1923年、曾根春翠堂にセク
レットというコピー機があった。

Hamond B (写真8)

Marusho Co., 1939
Half 127 camera incorporating 5 × binocular,
fixed focus Macold 50mm F4.5 lens in
Hamond T, B, 1/25, 1/50, 1/100 shutter.
D=147mm, H=94mm, D=77mm, 480g

双眼鏡とカメラを組み合わせようというアイ
デアは古くからあったようだ。ドイツのゲルツ

鉄道用ポケットウォッチそっくりのケースに
カメラを仕込んだもので、これも一種のスパイ
カメラだが、現実には遊びのためのもので
あったろう。これもアメリカのエキスポ・カメラ社
がウォッチカメラとして1905年に発売したもの
だが、同時にイギリスのホートン社もティッカ
の名で売り出した。半円形の紙製のカートリッ
ジに入ったロールフィルムに撮る。

ティッカには外側にギア列が並んだフォー
カルプレーン・モデルと、時計の文字盤の付
いたものがあつたが、いずれも天文学的に高
価だ。竜頭の先端のキャップを外して撮る。
通常はファインダーがないが、稀に反射式が
付いていることがある。私にはニュートン式
が付いている。日本にも上田写真機店にモメ
ントというコピーがあつた。

Steineck ABC Wristwatch Camera(写真4)

Steineck Kamerawerk c1948
Takes 8 round shots of 6mm diameter on
round sheet film of 25mm diameter. Steinheil
12.5mm F2.5 lens and single speed shutter.
Diameter=33mm, H=43mm, 40g.

エキスポ/ティッカがポケットウォッチ時代のもの
であるのに対し、リストウォッチ時代の時計
型カメラ。直径25mmの円形のフィルムに6mm
径という豆粒より小さい円形の写真を8枚撮
る。シュタインハイル製のレンズはF2.5と明る
いが、焦点距離が12.5mmしかなく深度が深
いので固定焦点である。シャッターが単速な
ので当然絞りがあつた。二重凹面鏡の反射ファ
インダーは古くからあつたもので、場所がない
ので苦しまぎれに使つたのだろう。

Stylophoto Standard(写真5)

SECAM, 1955, Takes 18 10 × 10mm photos
on 16mm film, 27mm F6.3 RR coated lens,
1/50sec. shutter

W=31mm, H=117/135mm, D=39mm, 85g

日本の秀好産業が1959年に発売したセブ
トンペンにはシャープペンシルとカメラの合体
だったが、これは万年筆型をしたカメラで、字
は書けない。多くのベークライト製カメラの設
計で知られるフリッツ・カフタンスキーの作品。

上部の白い金属部分を引き上げると、フィ
ルムが送られシャッターがチャージされる。円
形のオレンジ色はフィルターではなく、未
チャージの場合ファインダーを塞いで警告す
るためのもの。フィルムの両孔に爪を引っ掛
けて送るアンスコ・メモ式。

Camera-Lite Model B Gold(写真6)

Suzuki Optical Co. c1956
Takes 5 × 8mm photos, Echor 15mm F3.5
W=9mm, H=57mm, D=46mm, 80g

オードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペッ
クの名画「ローマの休日」で、カメラマン役の
エディ・アルバートが隠し撮りしたジッポ型
ライターカメラが「エコー8」。6 × 6cm判の高
級スプリングカメラ「プレス・パン」で知られる
鈴木光学の製品。その反射ファインダーを単
なる枠型透視ファインダーに簡略化した普及
型がカメラライトで、これはそのモデルBの
ゴールド。刻まれた「OTV」が何を意味するの
かわからなかったが、研究会会場で小林まゆ
み会員から、「大阪テレビジョンの略」であ
るとご教示いただいた。調べてみたところ
同TVが放映



写真 8 Hamond B



写真 9 Teleca



写真 10 Binoca



写真 11 TASCO Bino/Cam 7800

が1899年に出したフォト・ステレオ・ビノクルもその一例である。日本の丸惣が1939年に出したハモンドは近世では初の試みで、3×4cm判カメラに双眼鏡を組み込んでいる。

これは双眼鏡が5倍のモデルBだが、3倍のAもあった。レンズは50mm F6.3の固定焦点。別にF8付きもあった。

Telega (写真9)

Toko Photo Co., c1949~1952

Takes 10×14mm photos on 16mm film.

Telestigmat 90mm F4.5 lens,
B, 1/50, 1/75, 1/100 shutter

W=90/138.5mm, H=82mm, D=93mm, 550g

これは3倍の双眼鏡の上に16mmカメラを載せた戦後派で、東興写真が1949~52年に生産、アメリカにも輸出されたらしい。双眼鏡とカメラは無関係だが、双眼鏡の視野とカメラの画角は同じにしてある。10×14mmに95mmレンズは相当な望遠になる。レンズは当然フォーカシングできる。シャッターもBと50、75、100分の1。かなりの高級機である。

Binoca (写真10)

Binoca Co., 1950

Takes 10×14mm pictures on 16mm film.

Plastic body. Bicon 40mm F4.5 fixed focus lens, B, 1/25, 1/50, 1/100 shutter.

W=95mm, H=35mm, D=70mm, 230g

これはオペラグラスに16mmカメラを組み込んだようなもので、RBを持つ特異なプラスチック製のセミ判二眼ボックスカメラのビノックスでも知られる株式会社ビノカの製品。これもまたアメリカに輸出されて外貨を稼いだほうだ。10×14mmに40mmレンズだから、これもかなりの望遠カメラだ。白いプラスチックと金メッキのお洒落なカメラである。

TASCO Bino/Cam 7800 (写真11, 12)

1977~1981, 7×20 binocular with 110

camera body. Tele-Tasco 112mm F5.6 lens



写真 12 TASCO Bino/Cam 7800

single speed shutter at 1/125 sec.

W=106mm, H=66mm, D=128mm, 565g

7倍の双眼鏡に110カメラを載せたもので、ゴトー・サン製のオリックス双眼鏡カメラの対米輸出用。TASCOはバイヤーズブランドである。双眼鏡が7倍なので、カメラのレンズも110に対して112mmと長くしている。双眼鏡のピントを合わせると、カメラのピントも合い、双眼鏡の視野内にファインダーフレームが見える。これはレンズ固定の7000型だが、100mmと70mmのレンズが交換できる8000型もあったという。

Nicron Binocular Camera (写真13, 14)

Nichiryō Trading Co., 1968. Later sold as Ricoh Telega 240.

7×50 binocular with RICOH Auto-Half body.

Nicron 165mm F3.5 lens

1/50, 1/125, 1/250 shutter.

W=198mm, H=88mm, D=192mm, 1800g!

にちりょうトレーディング(日菱商事?)という会社が発売した大型の双眼鏡カメラで、双眼鏡は7×50のプリズム式。右の望遠鏡光路にビームスプリッターを入れ、右側面についてリコー・オートハーフのボディで撮影する。カメラ式に表すと、レンズは165mm F3.5となる。

1.8kgと石のように重いので、左の望遠鏡を取り除いたモノキュラーも作られた。後にリコーがリコー・テレカ35の名で販売した。

Triplon BCR 111 (写真15)

Cony Industries Corp. Tokyo

110 Camera with 2.5× binocular and AM radio receiver. Fixed focus 70mm F11 lens and 1/125sec. shutter. W=110mm, H=70mm, D=94mm, 180g

東京のコンニー・インダストリーズが製造したもので、名称のBCRはバイナキュラー、カメラ、レディオの略であろう。オペラグラス並みの2.5倍双眼鏡に、110カメラとAMラジオを搭載しており、それぞれ取り外せる。全プラス



写真 13 Nicon Binocular Camera



写真 14 Nicon Binocular Camera

ティック製で、オモチャとすれすれの遊び用だが、競馬の観戦などには便利だったかもしれない。ラジオにはスピーカーがなく、イヤホンで聴く。

CamBinox (写真16, 17)

J. D. Möller, Optische Werke, 1956

7×35 binocular with 16mm Camera. Takes 10×14mm photos on unperforated 16mm film. Standard lens is Jdemar 90mm F3.5 and metal focal plane shutter B, 1/30~1/800.

W=138mm, H=60mm, D=185mm, 1100g

Interchangeable Jdemar lenses:

35mm F3.5(Silver), 90mm F3.5(Silver), 90mm F3.5(Black), 135mm F3.5(Black), 180mm F3.5(Black)

さすがに西ドイツが最高級双眼鏡カメラを目指したものだけあり、精緻を極めたカメラだ。7×35の双眼鏡に16mmカメラを搭載したもので、無孔フィルムに10×14mmの絵を撮る。レンズ交換ができるので、双眼鏡と撮影レンズは直接関係なく、双眼鏡で測った距離をレンズのヘリコイドに移してから撮る。

Jdemar レンズはすべてF3.5で、標準の90mmとワイドの35mmがクロームであるほかは、135mm、190mm、それにもう1本の90mmがブラック。レンズ交換は精巧なバヨネットによる。レンズを通った映像は45度のミラーで下のカメラに送られるので、ネガは表裏逆になり、プリントの際裏焼しなければならない。

(了)



写真 15 Triplon BCR 111



写真 16 CamBinox



写真 17 CamBinox interchangeable Lens